

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

小さな手助け

僕は時間があるとすぐに川へ釣りに行きます。そのくらい釣りが好きです。狙う魚はヤマメやイワナで、どうやったら釣れるのか、どんな仕掛けがいいのか、そんなことをいつも考えていました。しかし、ほぼ毎日通っているのに、釣れるのは週に一匹ほどでした。お父さんや周りの大人たちは、「昔は今よりたくさん釣れた」とよく言います。そこで僕は、「じゃあ、なんで今は減ってしまったのか。」釣りが好きなので、そのことについてどうしても知りたくなりました。そのため僕は小学校の五年と六年の二年間をかけ、おおかわ学という学習を通して研究をしました。この研究の始めに立てた予想は三つあります。

一つ目は気候問題です。気温や水温の変化は、魚の生態に大きな影響を与えるからです。

二つ目は水の量が減少したことです。水が地面の下を流れる伏流水となってしまう、魚の住む場所が減ってしまったのではないかと考えたからです。しかし、これら二つの原因は僕一人の力では解決できないと考えました。

そこで、僕が目をつけたのは、三つ目の護岸によって川の流れが速くなってしまったことです。コンクリートの護岸によって直線的になった流れの勢いを、石などを置いてゆるやかにすることができれば、僕の力でも魚が住みやすい環境を取り戻せるのではないかと考えました。

まずは、実験の許可をもらうために、静岡市役所の河川課へ連絡をしました。僕の提案を真剣に聞いてくれて、実験の許可をもらったときはとてもうれしかったです。

二〇二四年の六月から、いよいよ実験を開始しました。まずは、川に手を加えない状態でどれくらい魚がいるのかを確かめるために、魚の調査を行いました。手製の囲いを仕掛けて一週間後、期待をもってあけてみると、一匹のヨシノボリしかかかりませんでした。やはり、今のまま

静岡県 静岡市立大川中学校 三年 牧野 翔

の川では魚が住むのは難しいのだとはつきり分かりました。そのため僕は七月から九月の三か月間、川に石を置いて作った壁を十列作りました。台風などがきて、何度もくずれてしまいましたが、あきらめずに直し、流れをゆるやかにし続けられました。

十月になり、石の壁を作った状態ではどれくらい魚がいるのかを確かめるため、同じ囲いを仕掛けて一週間後、おそろおそろあけてみると、そこにはなんとアブラハヤが十六匹、シマドジョウが二匹と計十八匹がかかりました。この結果から、僕は確かな自信をもつことができました。最初は一匹もないのではないかとおそろおそろあけた囲いですが、これだけの命が僕の作った水場に集まってくれたからです。ただ川が干上がるのを見ているだけでなく、自ら考え行動して、工夫をすれば、目の前の命を救うことができるのだと確信しました。

この経験を通して、環境を守ることは、他人事ではないと学びました。僕のような一人の小さな手助けでも、失われた命を繋ぐ力になれる。将来、僕は医師を目指したいと思っています。病氣の人を救うことと、失われた川を救うことは、少し似ている気がしました。どちらとも助けを求める声に耳を傾け、あきらめずに最善を尽くすことが必要だからです。これからも僕は、川を救ったときと同じように、失敗したときでも試行錯誤を重ね失敗を成功に変えていきたいです。そのくり返しが、将来の夢につながると信じています。